

# 立場の異なる者のあいだの連帯は可能か —— 水俣とネグロスにみる当事者、そして市民 ——

Considering solidarity between the people in different situations:  
Victims and citizens in Minamata and Negros

平井 朗  
Akira HIRAI

**Abstract:** Communication is the essential element of subsistence and supporting the people's activities to overcome violence for aiming at peace. But it is impossible to overcome violence by only communication without changing the people's behavior. The author searches for the turning point toward subsistence-oriented attitude through a viewpoint to the relationship between victims and citizens in Minamata comparing with the people's communication in Negros.

Masato Ogata, a patient of Minamata disease has radically examined the meaning of modern period and discovered “the gray zone reaching to karma of human being” and “arrival point that Chisso is me”. He is an agent of citizens exploiting nature (to kill fishes) as a fisherman. In the same way, if he were an employee of Chisso, he would also commit their crime. How unfathomable the darkness (karma) is. Can the citizens break through the gray zone?

The gray zone exists in not only among the victims but also inside the citizens, between the wrongdoers and citizens, victims and citizens. Even if the citizens noticed the gray zone showing reality that many people are killed daily, most of them would stop to think in order to justify doing nothing. The gray zone carries out to make the people be caught in their own trap for desire of the system. Breaking the gray zone is self-reliance, isn't it? Is solidarity possible?

The author takes notice of the change of relationship between the different subjects, and elucidates a way to overcome violence.

## 1. はじめに

世界には戦争のような直接的暴力だけでなく、格差拡大や環境破壊のような構造的暴力が満ちあふれている。日本でも3・11東電原発事件のために多くの人びとが生存基盤(サブシステム<sup>1)</sup>)を根こぎにされ、いまだに10数万人が流浪の状態におかれている。

一方、コミュニケーションは人類の永続的な生存基盤としてのサブシステムの不可欠な要素であり、暴力を克服し平和をめざすサブシステム志向の人びとの営為を支えるのもコミュニケーションである。しかし、このような社会構造に起因する暴力はコミュニケーションをも歪めており、人びとの行動を変容(生き方を変えること)しなければ、その暴力を克服することはできない。

本稿では、産業公害の原点である水俣における被害の当事者と市民のあり方への視点から、フィリピン・ネグロス島で周辺化される民衆の事例に通底する、コミュニケーションに内在する暴力を見据え、市民連帯によるサブシステム志向への転換点を探る。

## 2. 自力更生とグレイゾーンの内破

まず世界の格差に注目する。2005年に国連開発計画(UNDP)が発表した『人間開発報告書2005年版—岐路に立つ国際協力：不平等な世界での援助、貿易、安全保障』では、ミレニアム開発目標の達成期限(2015年)まであと10年を切ったにもかかわらず「実質的な成果は何も達成されていない。富裕国の貿易政策は依然として、貧困諸国と貧困者が世界の繁栄を公平に享受するのを拒んでいることが指摘された(UNDP, 2005, pp.2-3)。HDI(人間開発指数)低位国の多くには昨年と比べさらなる指数の低下が見られ、OECD(経済協力開発機構)諸国などとの地球的格差、また同一地域内での国家間格差、さらに同一国内での地域間格差の拡大は続いている。そのうえいわゆる新興国において経済開発にともなう環境破壊が顕著になり、UNDPはそれを「持続可能性と公平性のトレードオフ」(UNDP, 2011, p.6)と環境保護が第三世界の開発を阻害しているかのようにも主張している。

筆者が暴力を克服するコミュニケーションの研究を続けてきたのは、このような格差の拡大が、一つには現在の市場経済の不等・不公正な構造に起因するものであって、この不公正な市場経済を推進し、人びとの命や健康を奪っている開発主義から脱却する道を見出すためである。

イヴァン・イリッチの“*Peace is a Way of Life*”が講演として発表されたのは1980年末であるが、すでに1972年にはローマ・クラブによる『成長の限界』が、1973年にはシューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』が発表され、地球環境や資源の有限性という観点から経済発展至上主義の持続不可能性が指摘されていた。さらに90年代に入ってから、イリッチの思想を継承するC・ダグラス・ラミスも開発主義を批判する一方、現在のわれわれの政治経済システムにおいて「災難はもうすでに始まっていて、いわば次から次へと氷山にぶつかり始めているわけです」(ラミス, 2000, p.19)と述べている。しかし現実の世の中では30年経っても、だれもタイタニック号のエンジンを止めようとしなない。皆が「止めなければ沈没」とわかっていながら、その構造を知れば知るほど強固に立ちだかっているように見える世界資本主義システムのエンジン(開発主義イデオロギー)を止めることははたして可能なのか。破壊されたサブシステムの回復のために被害の当事者が自ら立ち上がること、さらに外部者がそれに連帯することは可能なのか。

現実にはタイタニックのエンジンを止められないうちに3・11東電原発事件が起こってしまった

た。官房長官やテレビに現れる専門家たちが「安全」を繰り返すなかで私たち自身が被曝の当事者とされたとき、いま進行しているのはかつて水俣で起こったことと同じことの繰り返しだということに気づかされたのだ。とすれば危険とわかっていながら原発を止められなかった自分自身が被災した当事者とのあいだですべきこと、できることも、水俣の、開発の暴力の被害者との今までの関係性の中から見出すことができるのではないか。

水俣病の研究者として知られる栗原彬は、テッサ・モーリス・スズキらとの共著書『3・11に問われて一ひとびとの経験をめぐる考察』のなかで「水俣事件とそっくり同じことが、いま福島で進行していると思ったのです。それ以来、私は水俣の経験から福島を見ています」（栗原，2012，p.119）と述べている。イリッチの主要著作『シャドウ・ワーク』の共訳者としても知られる栗原は、「人間の営みを日常生活から国家に至るまで考え抜く学問で、自我や家族や教育や文化の中にも政治を読み取る」（栗原，2006a）政治社会学者であり、70年代後半から水俣病を学び、水俣病を伝える活動を続け、『近代とは何か』、『人間とは何か』をあらためて問い直し（栗原，2006b）ている。

水俣という過酷な現実と、被害者とともに進める運動に基づくヴィヴィッドな論に接し、人間のアイデンティティの現れや共生をキーワードとする栗原の論を、「水俣病という思想」などの論文からめぐる。つづいて筆者のフィールドとしてきたフィリピン・ネグロス島で、開発の暴力に苦しめられてきた人びとが連帯を求めるコミュニケーション事例を参照しながら、立場の違う者のあいだの連帯について平和学の視点から検証する。

### (1) 当事者（被害者）をめぐる政治の推移

栗原は、論文「生命政治と平和」（栗原，2001）で、「生命政治」を生命そのものの場への権力の操作・介入をめぐって展開する政治のダイナミクスとしてとらえ、権力によって「剥き出しの生（死）」の淵に連れていかれる人びとを描き出す。さらに近代市民社会が、幸福な生の営みをデザインする政治と同じ判断基準に即して、社会的不適者とされた人びとを絶滅させる政治を不可分のものとして展開する（栗原，2001，pp.49-52）。

この「生命政治」が、市民のあいだにもともとあった下層民への差別を利用して水俣病を政治病・社会病（仮想現実）として作り出した。ここにつくり出された「表象の政治」は、生一権力の一部としての専門家（医者、科学者）だけでなく、社会に微分化された「下からの権力」（共同体、一般市民）が行う熾烈を極めた差別と排除によって展開された。「豊かな社会の持続」という仮想現実の上で、市民による「民族浄化」の嵐が吹き荒れたのだという（栗原，2001，pp.53—56）。

これこそまさに「非市民に対する差別をその存在の前提」（横山，1999，p.69）とする特権層としての市民の姿そのものである。病者を差別（差別のあるところに病者がつくられる）することで自らを豊かさの側に置いたと考える市民も表象の政治に支配され、従属させられていたので、病者はさらに重層的な構造的暴力の**くびき** 頸木に囚われていたのである。

栗原は「水俣病という思想（立教大学最終講義）」（栗原，2002）でも、石牟礼道子の『苦海浄土』（石牟礼，1969）の一節を引用し、1959年9月、水俣市民による安保反対デモが、通りかかった漁民のデモを吸収した描写から、「市民政治」が「人びとの政治」をむしろ圧殺する構図が見えた（栗原，2002，pp.3-5）と述べている。漁民は水俣病がチッソの排水のせいであることをよく知っていてデモをしていたのに、高度成長による豊かさを享受する（という意味ではチッソ水俣工場と同じ）市民たちは、その豊かさを支える「民主主義を守れ」と立ち上がった。しかし、自分らがその「豊かさ」を守るために殺されようとしている身近な漁民の存在にまったく気がつい

ていない。「多数派の快樂量を最大化する」市民の政治でしかなかった、と栗原は批判している。それを市井三郎の言葉によるなら、「快の増大」のみを志向し、「不条理な苦痛」の存在に気づかない、開発主義の陥穽<sup>かんせい</sup>にはまった市民といえる。

栗原は「水俣病は一つの政治思想です」という。水俣病者の政治に照らして、差別し、水俣病をつくり出し、そして水俣病を無視してきた「市民の政治」とは何なのかが見えてくる。そのために、水俣病の兆候が現れた1953年から50年間の「水俣病をめぐる重層的な政治の推移」をみる必要があるという(栗原, 2002, p.6)。

第一期＝1953年からの「自己決定の政治」、第二期＝1973年からの熊本県相手の政治(水俣病認定)、第三期＝1978年からの「代行政治」(国、裁判所相手の)、第四期＝1988年からの「和解の政治」、そして第五期＝1996年からの「もう水俣病は終わったと強弁する政治」。さらにその間に「存在の現れの政治」が現れた。

「死んだ子を返せ、金は要らん」と水俣病者は人間の尊厳の回復をかけ、加害者と直接対決するべく立ち上がったが、チツソ・国家・専門家の「システムの政治」の包圍網のなかで、市民に関心も払われないうなか、裁判を通しての「代行政治」が展開する。一方で、1977年の新認定方針のため、圧倒的な未認定者が「にせ患者」と差別され、自らのアイデンティティを得る道を断たれた。和解による解決という社会的圧力のなか、水俣病者は水俣病問題の本質から遠ざけられるばかりか、「金の分配の政治」の代理人にされる被害者が、加害者と被害者のグレイゾーンへと入っていった。そこに現れたのが、緒方正人の著書『チツソは私であった』(緒方, 2001)と認定申請取り下げである。

代行政治は結局「カネによる補償ということに帰着して、『産業の発展』と『近代化』、それを支える人間の欲望とシステムの装置に踏み込まうとしない[中略]M(緒方)は市民社会の仕組みに囲い込まれて、人間のことといえなくなった『システムの中の水俣病問題』からの離脱を決意する」(栗原, 2000a, p.73)。そしてテレビや車3台など身の回りの近代的なものを壊すという象徴的な行為に出る。近代をとことん問い、行き違ったのが「人間の業に届くグレイゾーン」であり「チツソは私であったという地平」であった。それは漁師である自分が、市民に代わって自然を収奪(魚を殺す)する代行者であるように、近代と市民社会の枠の中では、仮に自分がチツソの社員であったら同じことをしたのではないかという、底知れずの深い闇(業)である。

森岡正博は、「たしかに人間の『生命』には、他のあらゆる生命と共存し、生きとし生けるもの全体の循環のなかで静止を全うしようという本性があります。しかしこれと同時に、人間の『生命』には、自分たちが生き延びるためには他の生命を貪欲に利用し、犠牲にし、搾取してゆく本性があるのです」(森岡, 1994, p.191)と、生命の本性がはらむ二面性を指摘している。しかし、緒方が「狂い」ながら見出したグレイゾーンの本質は、たとえばアウシュヴィッツ強制収容所で死体処理をするユダヤ人(バンダーコマンド＝SK)のように「代行して殺す、代行して支配する、抑圧する」(栗原, 2002, p.18)ことだと栗原はいう。

「ユダヤ人を焼却炉に入れるのはユダヤ人でなければならなかった。・・・自分自身さえも破壊してしまうこと」(レーヴィ, 2000, p.52)を示すことを強制され、「犠牲者は自分が無実だという自覚さえ持てなく」(レーヴィ, 2000, p.54)なった。SS(ナチの親衛隊)にとってSKは「もはや自分たちと同様に非人間的で、同じ馬車に縛りつけられており、押し付けの共犯関係の汚れた絆で結ばれていると感じていた」。そこで行われたSSとSKのサッカーの試合。「おまえたちもまた、我々と同じように、カインと同じように、兄弟を殺した。さあ、来るがいい、一緒に試合をしよう」と(レーヴィ, 2000, p.56)。

ブリーモ・レーヴィは「だれも彼らを裁く権利はない」(レーヴィ, 2000, p.61)という。SKの「だれ一人として、生き延びたものはなかった」(レーヴィ, 2000, p.61)のだ。しかし現在のグレイゾーンの中にいる市民、あるいは私たち自身は、そこから突破することができるのだろうか。

## (2) グレイゾーンの内破か自力更生か

栗原(2002)では、グレイゾーンを内破<sup>2</sup>するためには「代行しない」、あるいは「他者を支配したり領有しない」ことであるとし、「そこに別の政治が浮かび上がる一つの突破口があり得る」という。そして緒方が「水俣病を生きて誇りに思う」三つのこととして、(1)魚が汚染されているとわかっていても食べ続けた、(2)胎児性水俣病者を育て、彼らを出生したあと子どもを産み続けた、(3)チッソに復讐しなかった。水俣病者はたくさん殺されたが、水俣病者はチッソのだれをも殺さなかったことをあげる(p.18)。

栗原は上の(1)を生命圏、共に命を授かっている限り、グレイゾーンの中に生きざるをえないという人間の業の深さ、(2)を命を選別しない、(3)を殺せなかった、のだという。自分が生き残るために他者を犠牲にすることの対極に、他者を生かし自分も生きるサブシステムの営みを置くならば、それは栗原がこれら三つのことを「結局すべての命への、『あなたが存在して欲しい』という呼び掛け」(栗原, 2002, p.19)というのと同じなのだ。

一方で被害者の緒方自身は、加害者との関係を以下のように述べている。

加害者チッソとは「仕組みとしてのチッソ」「構造としてのチッソ」のことなのではないか。[中略]ですから株式会社チッソとしては、判決で負ければ、責任もいやいや認めるし補償もしてきたわけですが、人としての責任は四十数年たっても認めていない。つまり的のはずの人間には突き刺さっていなかった[中略]水俣病患者と一口にいうけれども[中略]長い間、制度の中で闘い、制度を要求する闘いの中で、[中略]それぞれの「個」がなかなか見えなくなってきた(緒方, 2003, p.58)。

では産業公害の被害者が、その構造的暴力に対して始める闘い=自力更生営為は、グレイゾーンの内破と同義であるのだろうか。水俣病者の闘いはそもそも、被害者が加害者と相対して謝罪を求め、「水俣病者の正しさを求める政治」、「自己決定の政治」から始まり、患者集団ではなく一人一人の病者の断たれたアイデンティティを(人間として相対して謝れ、死んだ命は戻らなくとも開発優先を止め、新しい命を奪わないでくれということによって)回復する「存在の現れの政治」(栗原, 2001, p.12)へと展開した。自力更生の目的は自立であり、被害者が原状を回復し真に自立する(と同時に構造的暴力が克服される)ことにより、断たれたアイデンティティを回復し、癒しに至る必要条件(潜在的実現可能性)は整えられる。しかし平和学的なアプローチは構造やシステムを対象としているので、緒方の「金によって水俣病問題は終わったことにする」という構図です。そのシステムの連関を断ち切るというのが、認定申請を取り下げるという行為(栗原, 2002, p.22)である内破にまで到達するかどうか。法的な救済を超えて人間の業、心の暗闇、「的」に届き、魂を救済できるかどうか、つまりまだそこにコミュニケーションの課題が残されているのではないだろうか。

一方このグレイゾーンは被害者の中だけにあるのではなく、市民の内部あるいは加害者と市民、また被害者と市民のあいだにも存在する。栗原(2002)は再度(1)市民が豊かな社会を望むという、そのことだけで、玉突き状態になって、公害の引き起こしに加担してしまう。(2)企業と行

政が「終わったことにする」という現実を容認することでむしろ創り出す。(3) 公害病者への差別のまなざしを指摘し、「公害病者は三度殺される。そこに実は市民が関わっている」という (p. 27)。「生身の人間が日々殺されている現実を見物させられている」というグレイゾーンに気がついて、多くの市民はさまざまな言説 (内部処理) をあげて思考停止し、何もしないことを正当化する。

では、人を自縄自縛に追い込むことでシステムの欲望を代行してしまうこれらの言説を超え、グレイゾーンを内破することは自力更生なのか。そして当事者 (被害者) と市民の連帯は可能なのか。

### 3. 当事者によるコミュニケーション

そこでフィリピン西ネグロス州農村で復活祭の聖週間に毎年行われるキリスト受難劇カルバリヨ (KALBARYO) を、当事者自身によるコミュニケーション事例として取りあげ検討する。

#### (1) フィリピン民衆のコミュニケーションとしての宗教行事

本論で取り上げるカルバリヨが行われている地域は、西ネグロス州ラカルロータ市バランガイ・ラグランハを中心とするセント・ヴィンセント・フェレール・パリッシュ (SVF Parish = 小教区) である。1985 年から砂糖価格暴落のため失職した多くの農業労働者が飢餓に苦しむなか、SVF パリッシュではかねてより BCC (キリスト教基礎共同体) の組織化が積極的に展開されていた。カルバリヨの原型はこのうちのナガシ (Nagasi) 集落 (アシェンダ=封建遺制の荘園のように地主の所有する農園に労働者が居住する) の青年グループ (サトウキビ労働者など) が翌 86 年から自主的に始めた宗教文化運動タルタル (*taltal*)<sup>3</sup> である。同年のマルコス政権崩壊=アキノ政権成立によってもそれまでの軍による人びとへの暴力的抑圧はなくなり、むしろ「社会正義・国民民主権・外国搾取からの自由による真の平和を達成するために司祭たちは、貧困層との団結、解放と社会変革のための仕事、変革のエージェントとしての BCC 組織化の継続を圧倒的に提議」(Empestan, 2003, p. vii) せざるをえない状況だった。アキノ政権は NPA (新人民軍。比共産党軍事組織) に対して全面戦争政策を展開し、大量の国内難民を発生させたのだ。ナガシでは当時 NFSW (National Federation of Sugarcane Workers = 全国砂糖労働者同盟) の活動が盛んで、タルタルを始めたナガシ青年グループのリーダー、ロランド・ラバノン (Roland Labanon, 46 歳) と地域の NFSW の中心的活動家だった父親 (Robelto Labanon Sr.) らによれば、ラバノン家もしばしば武装兵士にとり囲まれるハラスメントを受けたので、BCC にも及ぶ軍の圧力を広く知らせるためにタルタルを始めたのだという。

1986 年にナガシで始まったときタルタルはまだ現在のように大規模なカルバリヨではなく、*taltal* (釘付けの意) の名のとおり、キリストの最期 (パシオン=受難) を表すだけの伝統的手法によって行われたが、観客となった近隣の人びとはそのキリスト受難の姿に自分たちの困難な状況を重ね合わせて感銘を受け、大いに評判となった。そこで 1988 年に SVF 教会のヴィック・ドゥマラオス神父によって教会区全体の行事としてラグランハに移され<sup>4</sup> (ナガシの青年も関わり続けた) た。1990 年新任のテレンス神父によって身の回りの現実とパシオンの文脈を重ね合わせる Contextualized 手法が取り入れられ、より広い意味をもったカルバリヨとして再生され、現在に至っている。

そのスローガンは、“*Kasakit ni Kristo, Kasakit sang Banwa sang Dios* (Sufferings of Christ, sufferings of People of God)” であり、キリストの受難を、現在の人びとの苦しみと重ね合わ

せる（コンテクスト化する）ものである。キリスト受難劇を聖週間に行う地域はフィリピン中にいくつもあるが、それに演劇化した民衆の現実を加えて見せるのはこの地域独特のものである。

具体的には、Traditional（伝統的手法）と呼ばれるキリスト受難の再現部分として、まずバランガイ中心にある広場で「最後の晩餐」から「キリストの逮捕」が演じられる。後ろ手に縛られたキリストを先頭に護送するローマ兵軍団や大勢の出演者らが行列して KALBARYO Hill と呼ばれる丘まで4キロほどの道のりを行進する。先回りして待ち構えている観客も多いが、相当数の観客が出演者の移動に連なって行列する。この丘の麓の第1ステージでキリストの裁きのシーンが演じられ、十字架を背負わされたキリストは丘の上の第2ステージへと急坂を上る。そしてそこで磔による死までが演じられる。

続いて、十字架上のキリスト役らの出演者をそのまま背景として、手前にしつらえられたステージで Contextualized と呼ばれる芝居が始まる。キリストの十字架上の最後の七つの言葉（seven words from the Cross）にちなんで、現代のフィリピン民衆を主人公にした七つのエピソードが演じられる。

2004年カルバリヨのテーマは“The Calvary of Christ: a seed for renewal of Christian Family”つまり「キリストの受難：クリスチャン家族再生の源」であった。例年この「テーマ」は Contextualized の内容を表すものでもあるのだが、今までは金持ちの欲による違法伐採などの環境破壊による人びとの苦しみ、海外出稼ぎ労働者の苦しみ、グローバリゼーションや輸入自由化によるサトウキビ労働者の苦しみ等々、その時々地域の人びとが直面する苦難を示すものであった。

## (2) 草の根宗教運動の背景—教会と民衆

16世紀中葉に始まったフィリピンに対するスペインの植民地支配はカトリックを利用した政教一致の支配体制であった。宣教師は人びとに「救いへの道は地上での苦しみを忍び、権力者に対して従順になることである」（アビト、1986, p.19）と来世での救いを教えた。

しかしフィリピンの宗教と社会運動の研究者、レイナルド・イレト (Raynaldo C. Iletto) によれば、逆に18世紀から土着化したキリスト受難詩（パシオン、*Pasyon*）は、「キリストの苦しみ、死と復活、審判の日の叙述において、たとえば闇から光へ、絶望から希望へ、窮状から救いへ、死から生へ、無知から知へ、屈辱から清廉へのように、時代の一つの状況からもう一つの状況への強力なイメージを与える。スペインと米国の植民地時代を通してこれらのイメージは、経済の、そして政治的な危機の時代に、圧制からの解放を約束する個人か集団の指導の下に小農に行動を起こさせうる千年紀信仰の底流を育んだ」（Iletto, 1989, p.14）という。フィリピン民衆の一部は宣教師らの意図に反して、パシオンによって自分たちの苦境を理解し、キリスト教を普遍的な解放のための歴史観として理解するようになったのである。

さらに第2バチカン公会議（1962-65年）以降のカトリック教の変化（中南米の「解放の神学」など、民衆の中で実践することが福音そのものとする考え方の勃興）の影響がある。それは国家の支配体制の一部としてのカトリック教団組織が各地の教会の建物と共に領地をもち、支配エリートとしての司祭の下に信者たちがかきずく宗教から、教皇パウロ6世の回勅『ポプロールム・プログレシオ（諸民族の進歩）』（1963）に表された人間中心主義、貧困の原因となっている「構造的不正義に目を向けさせ」（オプライエン、1991, p.46）<sup>5</sup>る宗教への変化である。この民衆と共にある教会への変化は、『『神の民』をもって教会とし、その民には司祭と信徒両方が含まれ、信徒も共通司祭職を行使し得る』（丸山、1991, p.74）とする聖書理解に基づく典礼改革があった。

このカトリック教の改革は1967年2月にバコロド司教に叙階されたフォルティッチ司教 (Bishop Antonio Y. Fortich) によって西ネグロスで次々具体化された。主なものはまず1969年、ラテン語ではなく地方語＝ヒリガイノン語でのミサが行われるようになり、宗教儀式は民衆にとって秘儀ではなく自分たちの苦痛をキリストの受難と結びつけてとらえる機会となり、自分たちの世界を批判的に見られるようになった。次にパニンバホン (*Panimbahon*) と呼ばれる神父なきミサ、言葉の礼拝奉仕を民衆自身が行うことで、神父のなかなか来られないような遠隔地でも「福音を自分たちの共同体の問題に当てはめられる」(オブライエ、1991, p.215)<sup>6</sup> ようになった。民衆が神と直接交通して共同体を始められる基礎ができたのである。そして共同体の形成である。建物ではなく人びとの信仰の中心としての教会を核とする、民衆の自律的で分かち合いを旨とする活動、BCC (Basic Christian Community = キリスト教基礎共同体、1970～) があちこちの集落で始められ、「貧困」やマルコス政権 (1965～1986) による地域の軍事化に対抗したのである (オブライエ、1991; Empestan, 2003)。

したがってカルバリヨの、その時々民衆の直面する苦難をキリスト受難に重ね合わせて民衆が自ら他の民衆に知らせるというコンセプトは、教会のミッションによって突然与えられたものではなく、社会変革に立ち上がる西ネグロスのカトリック教会の変化の中に、人びとの日常の自律的宗教活動、共同体建設の営為の中にそもそも内包されていたのだということができよう。しかしながらカルバリヨという大きなイベントの形式をとった表現行為を毎年行うのは、ひとつのデモンストレーションのかたち<sup>7</sup>、民衆による民衆への教育という意味以上に、参加する青年層への教育、青年の団結の意味が強いとSVF小教区青年組織コアグループのメンバーたちは語っている。

カルバリヨをはじめ年間を通したさまざまな活動には、青年層のみならず小教区全体の老若男女が無報酬でさまざまな役割をもって関わっている。小教区全体と青年組織のそれぞれに、小教区内の地区代表による委員会のほか、司祭と共にミサの進行を行う典礼委員会、財政委員会、教育委員会、組織委員会、国際連帯委員会から音楽委員会等々までが組織され、多くの人びとにとって信仰をもった人びとの集まりとしての教会が日常生活の中に深く組み込まれている。とくにカルバリヨのためには特別な実行委員会が設置され、実施のための運営、財政、広報、記録、輸送、通信、保安、食糧、保健、宿泊、調達、典礼からももちろん制作、音響照明に至るまで信徒の総力をあげて参加、協力、実施する体制がとられている。信徒のすべての人びとが何らかの形で直接的にカルバリヨ実施のための活動に参加するのである。

一方でこのような小教区や青年組織の活動は、NFSWや農民運動の活動や弾圧の歴史を身近に見ながら育ったナイーブな青年層、また学校を卒業してもなかなか就業機会が得られない青年層にとって数少ない temporary job であり、また打ち込める活動の機会にもなっている。しかしこのような教会を中心とする活動、とくにBCCの活動が、軍や国家権力、あるいは大地主の側からは、NPA (新人民軍、比共産党軍事組織) と同一視されてきた歴史を無視することはできない。つまり、民衆が自分たちの問題を自分たちで考え、自身の組織化を行っただけで、既得権益をもつエリート層からは国家に弓引くものと刻印されたのである。

### (3) 意識化への気づき

永いあいだアシェンダ (荘園) でばらばらに抑圧されてきた人びとは、「貧困」や生活苦は神から与えられた試練と思われてきた。2004年4月においてすら、筆者のインタビューに対してサラマンカというアシェンダで働くサトウキビ労働者の青年の一人は「(現在の困難は) 神の思



し召しだから祈るだけです」と答えた。つまりこのような世界において民衆は自分自身を、自分たちの歴史を語る言葉をもたず、支配者のみが言葉をもつ。つまり相手を定義する力（言葉）をもつ者が権力をもつのである<sup>8</sup>。

それに対して、現在の民衆の苦難をキリストの受難になぞらえることによって民衆が自らの言葉を奪還し、自分たちの問題を認識し、民衆自身による歴史の叙述<sup>9</sup>を始める過程、すなわち人びとがカルバリヨで描こうとする現在進行形の歴史を自らの手で紡ぎだす営為こそ「意識化（conscientization）」の過程であり、民衆自身の内面化された構造的暴力克服の過程であり手段であり、構造的暴力を認識するコミュニケーションともいえるのである。

しかしながら、ラグランハ周辺の多くのアジェンダでばらばらに抑圧されてきた人びとにとって、彼らの抑圧者であるエリート、地主や軍といったものは、もとよりたとえようもなく巨大な存在であって、各個ばらばらに対抗しようとしても立ち向かえる相手とは考えられない。したがって暴力と抑圧の歴史を認識した人びとは、次にその認識（歴史）を紡ぎだす主体として、さらに外部の同じような立場にある人びとに向かってその認識を伝え合い、共闘を募り、あるいは構造的暴力を「はさみうち」（井上, 1982, p.114）<sup>10</sup>にすることをめざすコミュニケーションによって、変革のための集団的主体を形成するのである。人びとはカルバリヨをとおして自分たちの認識を地域の中だけでなく外部にまで広めることによって共闘を募っているのだ。

パウロ・フレイレは以下のように述べている。

少数者と呼ばれている人びとにとって必要なことは、ほんとうは自分たちこそが多数者なのだということを認識することです。自分たちを多数者と考えるためには、たんに差異を見るだけでなく、自分たちのあいだの共通性に注目し、「多様性の下での統一」をつくり出していく必要があります。（フレイレ, 2001, p.215）

そして「世界を変えようとする『性向』のようなもの」（フレイレ, 2001, p.202）<sup>11</sup>を共有する集団的主体によって、暴力を克服する具体的行動としての自力更生が始められたことは、そこに当事者自身による意識化と、連帯のコミュニケーションが成り立ったといえるのである。

#### 4. 共苦と「はさみうち」の論理

では当事者から連帯を呼びかけられている市民は、どうすれば加害者と被害者のグレイゾーンを内破することが、自らの生き方を変えることができるのか。

##### (1) 新しい公共圏とサブシステム

緒方正人は水俣病の闘いの中で、「開発本位の、供犠を伴う暴力的な公共性」と「生命を尊重し、人間の尊厳を救い出す生存の次元の人々の公共性（人と自然、人と人の相対ないし共生としての公共性）」（栗原, 2000a, p.71）の二つの公共性がすれ違ったように感じたという。認定申請を取り下げた「緒方が従来の運動の側から裏切り者と呼ばれたりしながら、野仏を建立するようなふるまいが、市場的で権力的な編制（快樂計算を伴う最大多数の最大幸福。エコノミーや稀少性をめぐるゼロサムゲーム<sup>12</sup>）の鎖列を断ち切り、存在の現れの系列を生み出していく」（栗原, 2002, p.23）という政治である。

栗原は、いまや難民状態が普遍化したグローバリズム下の日本のさまざまな互酬的な活動の

基底に歓待 (hospitality) やサブシステム (存在の現れ、生命の別の形式の現れ) があり、新しい公共圏 (本来の市民政治の可能性) をつくっていくとする。日本平和学会の講演<sup>13</sup>においては、生命圏から遠離してゆく政治 (自己決定権)・経済 (快樂量の最大化)・社会 (秩序)・文化 (異質なものを同化する、同コード内のコミュニケーション、global standard) とは逆に以下のものを提示した。生命圏へ漸近する NPS (贈与・非所有)・NGS (自律—ケア—非支配)・NSS (歓待、home—共同性—非領有)・NNCS (異交通—非我有化) のなかで、今まで書かれてきた政治・経済・社会・文化の剥き出しの生とは異なる新しい生の形式 (サブシステム) が書かれる場が生命圏であり、生命圏から遠離するところに公共圏はつくれないというのだ。その意味では「自然生態系の中で人間社会を維持し、再生産していく仕組み」(横山, 2002, p.15) という横山らのサブシステム理解につながるものである。

栗原 (2002) は「平和で豊かな暮らしを享受して生きる」ことで加害者と被害者のグレイゾーンにいる市民が、「戦争を止めたい、公害に反対したい、子どもを救済したいという生き方」とどうつながりをつけるのか、生き方をどう変えざるをえないのかについて以下の5点をあげている (pp.29-30)。

- a) 痛みをもった他者のまなざしに見られること。彼我のまなざしの差 (パララックス) からヴァルネラビリティ (傷つきやすさ) が働き、「チツソは私である」というような「まなざしのグレイゾーン」に入る。
- b) 聞こえない他者の声の代行にならず、他者の声によって (構造に加担している) 自分のほうが変わる。
- c) 市場的で権力的な編制 (希少性による金儲け) を、たとえば非営利な市庭 (いちば、サブシステム維持のための交換の場) によって内破する。
- d) 「水俣病の患者さん」のような表象 (運動の中で人間を集団でとらえること) から「固有名を持つ一人ひとりの人間の存在」へ。
- e) サブシステムの構築—生命圏に近づく新しい公共圏 (現れた存在が誰にも領有されることなく生きていける場) の創造。

市民と被害者のあいだのグレイゾーンは結局、市民が自分自身で変化して新しい公共圏に存在の現れの政治を確立していく以外にないということである。これは、自らを規定している自己概念からの解放を意味し、「何者かになろうと懸命に励んで、知識や技術という服を幾重にも着こんでいくのではなく、逆に着膨れしている服を一枚一枚脱いでいき、自分の生命力の源に触れること」(森田, 1998, p.178)、つまりエクスポージャー<sup>14</sup>によるエンパワメントそのものではないだろうか。森田ゆりは「エンパワメントとは『力をつけること』ではない。[中略]それは人と人との関係のあり方だ。人と人との生き生きした出会いのもち方なのである」といい、また「エンパワメントとは、私たち一人ひとりが誰でも潜在的にもっているパワーや個性をふたたび生き生きと息吹かせること」ともいう (森田, 1998, p.14)。グレイゾーンの内破を換言すれば、それぞれが (エクスポージャーを通した) サブシステム志向の自力更生営為により自立 (エンパワメント) することで、それぞれのあり方と相互の関係性を変え、開発主義から脱却しようという脱開発コミュニケーションであるといえる。自力更生と市民連帯によってサブシステム志向の新しいシステムを創ることを、栗原は、生命圏に近づこうとする運動によって「新しい別の公共圏を創造する」(栗原, 2002, p.31) と述べたのである。

## (2) 共苦一代行でなく

齋藤純一は「公共圏と親密圏を分析的に区別する——分析的に区別可能ということは実態としては重なりうるということである——基準として適切であると思われるのは、公共圏が人びとの《間》にある共通の問題への関心によって成立するのに対して、親密圏は具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」（齋藤, 2000, p.92 [強調原文]）という。

たとえば生の困難を抱えている当事者が、「孤立のうちに困難を抱え続けなければならないという苦境を打開するために形成」するセルフヘルプ・グループは、「情報や意見の交換を通じて直面する問題への認識を深め、外に向かって問題を提起していくという公共圏の側面をあわせもつこともある」。つまり「親密圏は同時に公共圏の機能をはたすこともある。というよりもむしろ、新たに創出される公共圏のほとんどは親密圏が転化される形で生まれる」（齋藤, 2000, p.94-95) のだ。「公共の福祉」の名の下に推し進められる開発に対抗する新たな公共性は、「生命圏に根をもつ新しい親密圏を形成して、[中略] そこから垂直に立ち上げ」（栗原, 2000c, p.14) られるものとなる。

市民が被害者自身のコミュニケーションに応える可能性は、専門家によるシステムとしての「代行政治」の中にあるのではなく、他者の生命への感受性としての共苦の中にあるのだ。

## 5. おわりに——自力更生の連帯としての「はさみうち」へ——

市民自らがパターナリズムや権力の罠に陥らずに社会的弱者、当事者との連帯を図ることは、緒方正人 (2001, p.96) が「命の記憶」という、命の共同性を軸につながっていくことである。それは他者の状況に専門性や代理性をもって関わるのではなく、それぞれが当事者として自らのおかれた状況の頷木に自らの状況の中で立ち向かう自力更生によってしかない。「生活世界の中に、それこそが生の根拠、生の歓びの源泉である非支配・非領有の場を確保し、また再生すること」（栗原, 2000c, p.6) なのである。つまり第一にそれぞれが、それぞれの状況の中でサブシステム志向の自力更生を営むこと。第二にそれぞれの自力更生営為が構造的暴力を「はさみうち」することによって克服していく。そのための不断の意識化をすすめるコミュニケーションによって、被害者と市民が互いに当事者として連帯する新しい公共圏が具現化するのである。

本稿では主体間、当事者間の関係性の変革に着目して、暴力克服の道筋の解明を試みた。自力更生を行う当事者同士の連帯は、ODA や NGO のような外部者と第三世界住民のあいだにあるべきコミュニケーションの態様をも示唆している。人びとがサブシステム志向へ転換する行動変容の具体的な過程を明らかにすることは、ネグロス島での調査研究の今後の課題であるとともに、筆者らが直面する喫緊の課題でもある。

目に見えない放射能によってサブシステムが根こぎにされた福島を中心とする多くの人びとが避難民となっているが、同じ被災者、同じ原発の被害者のなかで、避難区域や補償金の線引き、線引きの変更などによってさまざまな分断が起きている。さらに汚染に怯えながら地元に残る被害者のなかでは放射能について語ること自体がタブーとなるように、コミュニケーションそのものが暴力と化す状況も起きている。原発周辺の被害者とともに、低線量被曝の当事者でもあるわれわれにとっての自力更生とは何であるのかを見据えて、今後も暴力克服のための連帯への道を模索していきたい。

## 註

- 1 「生命の存続および再生産を支える生命維持系（システム）のことをサブシステムと、とりあえずおいてみよう。生命維持のための物質的諸条件だけでなく、それを永続させる環境（自然生態系）および社会的諸条件がその構成要素となる」（横山，2005，p.224）。
- 2 「内側から破砕する挑戦」（栗原，2000b，p.13）を内破という。
- 3 釘づけすることが語源で、キリスト受難を演劇によって表すものである。
- 4 タルタルがラグランハ（つまり小教区中央）に移されたのは、小教区全体の青年組織の団結を推進する狙いがあった。
- 5 オブライエン神父はコロパン会に属し、ネグロス島のBCC（キリスト教基礎共同体）初期からの中心的組織者の一人。
- 6 パニンバホンは1966年からオブライエン神父らによって始められた。
- 7 前BCC総主事、ロメオ・エンペスタン神父へのインタビュー（2004年3月26日）より。
- 8 権力者が権力者であるための前提条件として、かれらはきまってる一つの権利を絶対化しようとする。それは、権力なき者のプロフィールを描き、かれらを勝手に叙述する権利です。こんなふうにして、権力をもつものが権力を持たざる者の肖像を描き、後者がそのプロフィールを実際に体現してしまうなら、描いた権力者の権力がいっそう強化されることは明白です」（フレイレ，2001，p.214）。
- 9 フレイレの定義する人間＝「発話する交信的存在」が「自分の置かれている現実を分析する過程のなかで、自分のこれまでの歪んだ認識を自覚することによって、新たな現実認識に到達する」（フレイレ，1979，p.139）。
- 10 日本からの公害輸出を、輸出先の市民と連帯して止める論理を「ばばぬきの論理からはさみうちの論理へ」と表現。
- 11 「世界についての知的な視野が開かれれば」「自分の中にうまれてくるはず」のものであるとフレイレはいう（フレイレ，2001，p.202）。
- 12 イヴァン・イリッチの「ボックス・エコノミカ（経済平和）」と同じである。
- 13 「サブシステム（生命・環境）への暴力と平和」日本平和学会関東地区研究会，2003年4月19日、於明治大学。
- 14 エクスポートジャーは「身も心も丸ごと別の地の人びとの生の状況に触れる」こと。「これまでの自分のまってきた殻をなるたけ脱ぎ捨て、自分が変わり、出会った人びととの関係をそこから洗い直し、自分たちを全体として包み込んでいる構造的暴力を克服していこうとする共同の営為の第一歩がエクスポートジャーなのである」（横山，1993，pp.47-48）。

## 参考文献

- Empestan, R. E. (2003). *Brief history of the church of Negros*. Bacolodo, Diocese of Bacolod.
- フレイレ，P. (1979) 『被抑圧者の教育学』（小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周・訳）垂紀書房。[原著：Freire, P. (1970). *Pedagogia do oprimido*. Rio de Janeiro. Paz e Terra].
- フレイレ，P. (2001) 『希望の教育学』（里見実訳）太郎次郎社。[原著：Freire, P. (1992). *Pedagogia da Esperança Um reencontro a pedagogia do oprimido*. Rio de Janeiro, Paz e Terra].
- アビト，R.L.F. (1986). 「カトリック教会と植民地支配—19世紀フィリピンの抵抗運動に視座を置いて」アビト，R.L.F.・山田経三（編）『フィリピンの民衆と解放の神学』（11-32頁）明石書店。
- Ileto, R. C. (1989). *Pasyon and revolution – Popular movement in the Philippines, 1840-1910* (Third Printing), Manila, Ateneo de Manila University Press.
- 井上澄夫 (1982). 『歩きつづけるという流儀』晶文社。
- 石牟礼道子 (1969). 『苦海浄土 わが水俣病』講談社。
- 栗原彬 (2000a). 「水俣病という身体—風景のざわめきの政治学」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉（編）『内破する知—身体・言葉・権力を編みなおす』（69-85頁）。東京大学出版会。
- 栗原彬 (2000b). 「はじめに」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉（編）『内破する知—身体・言葉・権力を編みなおす』（1-14頁）。東京大学出版会。
- 栗原彬 (2000c). 「市民政治のアジェンダー—生命政治の方へ」『思想』908号，6-15頁。岩波書店。
- 栗原彬 (2001). 「生命政治と平和」『平和研究』26号，49-64頁。日本平和学会。
- 栗原彬 (2002). 「水俣病という思想」『立教法学』61号，1-33頁。立教大学法学部。

- 栗原彬 (2006a). 『立教大学法学部案内』. 2006年3月28日 [http://law.rikkyo.ac.jp/rikkyo\\_annai/020.htm](http://law.rikkyo.ac.jp/rikkyo_annai/020.htm) より情報取得.
- 栗原彬 (2006b). 『水俣をつたえつづけるために (水俣フォーラム趣意書)』. 2006年3月28日 <http://www1.0038.net/~minamataforum/01forum/01tsutaeru.html> より情報取得.
- 栗原彬 (2012). 「座談会 原発危機のただなかで」栗原彬・テッサ・モーリス - スズキ・刈谷剛彦・吉見俊哉・鈴木敦 (編) 『3.11に問われて—ひとびとの経験をめぐる考察』 (113-158頁). 岩波書店.
- レーヴィ, P. (2000). 『溺れるものと救われるもの』 (竹山博英・訳). 朝日新聞社. [原著: Levi, P. (1986). *I sommersi e i salvati*. Torino: Giulio Einaudi editore].
- ラミス, C. D. (2000). 『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』 平凡社.
- 丸山忠孝 (1991). 「ヴァチカン公会議」宇田進 (編) 『新キリスト教辞典』 (72-75頁). いのちのことは社.
- 森岡正博 (1994). 『生命観を問いなおす—エコロジーから脳死まで』 筑摩書房.
- 森田ゆり (1998). 『エンパワメントと人権』 解放出版社.
- オブライエン, N. C. (1991). 『涙の島 希望の島—ネグロスの人々とある神父の物語』 (大塚佐太郎・大河原晶子訳) 朝日新聞社. [原著: O'Brien, Niall C. (1987). *Revolution from the heart*. New York, Oxford University Press].
- 緒方正人 (2001). 『チツソは私であった』 葦書房.
- 緒方正人 (2003). 『人としての生命の記憶を願う』 水俣フォーラム・ウェブサイト. 2003年7月9日 [http://village.infoweb.ne.jp/~minafo/kinen/000429\(ogata\).html](http://village.infoweb.ne.jp/~minafo/kinen/000429(ogata).html) より情報取得.
- 齋藤純一 (2000). 『公共性』 岩波書店.
- UNDP (2005). *Human development report 2005*. UNDP. 2005年9月7日 [http://hdr.undp.org/reports/global/2005/pdf/HDR05\\_overview.pdf](http://hdr.undp.org/reports/global/2005/pdf/HDR05_overview.pdf) より情報取得.
- UNDP (2011). 『人間開発報告書 2011 概要』 2012年9月23日 <http://hdr.undp.org/en/reports/global/hdr2011/download/jp/> より情報取得.
- 横山正樹 (1993). 「第三世界と先進工業諸国にわたる市民連帯は可能か」久保田順 (編著) 『市民連帯論としての第三世界』 (25-64頁). 文眞堂.
- 横山正樹 (1999). 「構造的暴力と積極的平和」岡本三夫・横山正樹 (編) 『平和学の現在』 (54-65頁). 法律文化社.
- 横山正樹 (2002). 「暴力は本来性 (サブシステム) を奪う」戸崎純・横山正樹 (編) 『環境を平和学する!』 (13-24頁). 法律文化社.
- 横山正樹 (2005). 「環境平和学としてのサブシステム論」郭洋春・戸崎純・横山正樹 (編) 『環境平和学—サブシステムの危機にどう立ち向かうか』 (217-239頁). 法律文化社.